

# 大学は社会に何を貢献しうるか

## 21世紀の私学と同志社

小野修

### 1 主義

かつて大学で学ぶことは一部の人に限られていた。角帽は一種のステイタス・シンボルであり、学生服と皮カバンもそれとは切りはなせないものだった。しかし、高度経済成長のはじまる一九六〇年代には学生数は飛躍的に増大し、それと共に角帽は町から消え、学生服も皮カバンも姿を消して、かわってジャンパーやセーター、Gパンが登場する。学生のファッションをかえたのはまず、多分、六〇年の安保闘争がきっかけで、それにつづく高度経済成長期のアルバイトやレジャーやスポーツだったのではないかと思われる。こうして、大学生はその制服をぬぎすてて個々人の好みに合った自由な服装をえらんだ。街で若い人を見かけたとき、その人が学生か勤労

者かどうかを服装で見分けることは昔ほど容易ではなくなつた。

六〇年代の終りの頃は大学紛争が全国にひろがり、この頃にヘルメットにカーキ色のジャンパー、タオルのマスク、ジーンズに軍手、ゲバ棒という戦闘スタイルが流行し定着した。この服装はその着用者が授業や研究よりむしろほかの場に関心を持っていることを卒直にあらわしている。たしかに、授業や研究より優先すべきものを政治的課題の中にとらえようとした危機意識は当時の学生の多くにみられた。しかし、中国の文化大革命が、ヨーロッパそして、アメリカにおける学生運動に飛び火し、海を渡って日本にひろがったとき、その紛争の多くはかなり様式化してしまつていた。ベトナム反戦歌を唄うバエズの甘い声は、封鎖されたキャンパスから程遠いところでアルバイトにいそしむ学生をセンチメンタルな気持にさせ

た。大学生であることは、受験から解放された四年間の大半をいわば長い余暇の時間として拘束されず気ままに過ごすことであり、それはそれなりに意味のあることだという悟りのような境地に浸ることをおぼえさせたのもこの時代だった。反戦集会のあと耳をつんざくロックのひびきの中で判断停止のひとときを過した学生たちが、ある意味では多少とものパワーをつくり出し、アメリカにおけるニクソン批判の世論をささえアメリカのベトナムへの軍事介入を ついにあきらめさせる一助ともなったことも本当である。しかし、「それっきり」だった。ニクソンは日本の頭ごしに中国と手を結び、インドシナには中ソ対立が持ち込まれ、カンボジアの二重の悲劇が はじまる。社会主義勢力同士の角逐、抗争、内乱、戦争——この悪夢のような紛争の連鎖は、しかし、今も現実のものなのである。

本来は理想の実現への途であつたはずの社会主義が何故地上に地獄をつくり出したのか。砲声のとどろくタイカンボジア国境の難民村で泥と垢にまみれた何万というクメール人をみたとき、筆者はその疑問にさいなまれた。ある意味で、インドシナの悲劇はソルボンヌ（パリ大学）のキャンパスにはじまると言える。地上に楽園を容易につくりうると信じ、学び、行動したかつての留学生たちが権力の座につき、その理論を現実適用する際に、障害と抵抗の克服は一挙に破壊的な様相をたどつたのだ。米軍敗退の一九七五年以降のインドシナには平和と名のつくものはない。拷問や虐殺の恐怖にもとづく民衆の黙従を秩序と言えらるうか。一部の慢心した革命的エリートは複雑な理論に現実を無理矢理に近づけようとする強権主義は文化大革命の所産であつた。ここでは意見の多様性は認

められず、討議も歩みよりもなく、あるのはただ「友・敵関係」という政治状況だけである。敵は徹底して撃破、殲滅、掃討、肅清の対象とされる。敵は往々にして人間であるとすら認められないのである。これはファシズムの論理である。理論闘争上の敵を階級の敵と見なすなどということは毛沢東ですらいましめたことだった。しかし、社会主義が陥つた理論と実践とのかたくなな統一志向は、こうして政治理論による学問的知識の荒唐をもたらしただけで、学問を政治に奉仕させようとする志向は芸術を政治の手段とすること同様狂気の道に通ずる。

第一次大戦以後何故、世界に、それ以前にみられたような画期的な学問的発見や進展が少なく、既成の学問成果の技術的応用と、大規模化した実用化のみが目立つのか。これはひとつには大学それ自体の荒唐がもたらした帰結なのである。大学がこれまで国家に奉仕したり、党に奉仕したり、産業界に奉仕したりして、その本来の機能であるはずの、人間社会に役立つ人材の育成と学問それ自体の発展に寄与するための作業を怠るか、それを阻まれてきたためである。

二一世紀の大学の使命は、こうした支配の構造が生み出す矛盾を克服することであり、それなくしては、二一世紀は今世紀より更に悲哀に満ちた抑圧的な状況をもたらすことになるだろう。

## 2 進路

大学のあり方についての論議はおそらく次の三つの課題へのとり

くみ方として集約されるだろう。

一、大学は何を学ぶところか。

二、学問は教えることができるか。

三、大学の政治とのかかわりは如何にあるべきか。

もし大学が単に専門的知識を探究したり授けたりする場所であるなら、研究所と専門学校があればよいことになる。ところが、社会は大学に全人格教育をも期待しており、これは倫理にかんする事柄であるだけに、知識とは別の次元に属する。たとい万学に通じていたとして人間として立派な生き方ができるとは限らないということ、象徴的にゲーテの『ファウスト』で描かれたきわめて大きな問題である。学問の進歩の歴史をふり返ってみるとき、先駆的な作業を行った研究者の多くが、世間知らずで、ときには性格的破綻者ですらあったことは「知識を増すものは愛を増す」(『伝道之書』)という言葉を裏書きするかのようである。

何のためにどのように知識が活用されなければならないかという課題は教育の基本にかかわるものであり、それは「人間は如何に生きるべきか」という実践的な価値観の模索につながる。それにして「人間としての生き方」を大学で教えることはできるのだろうか。

受験競争を通じ雑多な断片的知識の詰め込み教育を受けてきた学生が大学入学後あらためて「真理とは何か。自分は何のために存在するのか」と主体的に問い直す場合、それに大学が応じえないとしたら、学生は幻滅を味わいニヒリズムに陥るだろう。学生と共に悩み考える理想的な教師としてのソクラテスの人物が大学には必要

であろう。その場合、教師は研究者としての優れた素質よりも、教育者としての資質を求められるのだが、同時に学生は心服に働かせる研究業績をも教師に求めるだけに、大学の教師たるものは自らを理想に近づけようとすれば尋常ならざる努力を必要とする。しかし、その努力を喜びに変えるものは、つねに教師と学生とのあいだの信頼関係である。

専門的知識や職業的技能はこうした信頼関係がある限り教えることはできる。しかし、学問を教えることはできない。学問の習得はその大部分を本来自学自習に負っており、教師は単にヒントを与えるだけの存在でしかない。これはソクラテスのような優れた教授法をもった教師であっても、その弟子プラトンに自らの真意を結局は伝えることができなかったということからも知られる。とはいえ、教師は学生に学問の方法について多くの指針を示すことはできる。

こうして、学問の本質をなす知的な喜びと創造意欲は、優れた教師から勉学の熱意に目覚めた学生へと点火され、次の世代へと受け継がれていく。

学問がひとの心を浄化する働きをもつ場合が多いとすれば、それは、学問を通じて、事物を私心を去って永遠の相下に眺める「曇りなき眼」をもつことに近づきうるためであろう。

この学問にかんすることを、数学を取扱うのと同様の捉われないう精神をもって探究するために、私は人間の行動を、笑わず、欺かず、呪詛もせず、ただ理解することにひたすらつとめた。

スピノザ（二六三二―七七）のこの言葉は今日も科学精神の基本的要素である。これとは対照的に、マルクスの墓碑銘となった有名な言葉、「これまでの哲学者は世界を様々に解釈してきたに過ぎない。変革することを目指すべきであるのに。」という言葉は実践を理論に優先させる考え方をあらわしている。政治は学問を利用することはできるし、学問は政治を研究対象とすることはできる。しかし、学問を党派的権力の具とすることは知的退廃を招くだけである。

大学は今日、学問のための聖域ではなくなりつつある。しかし、学問の公平な精神は広く社会に伝播すべきものであって、大学は社会における少数者の専有物であってはならない。その意味からも、右であれ左であれ、大学の教育や研究に党派性を持ち込むことは学問の自由のためにも避けるべきことである。

私学の利点は政府からの圧力と介入を国公立ほどに受けずにいることだが、将来、私学の国庫助成が進めば政府の圧力は強くなるだろう。同志社は一流大学だが、超一流大学ではない。財政規模からではなく教育と研究成果からみて超一流大学になることが、二一世紀における同志社の私学としての自由と存続のためのきめ手となる。これは全同志社人の努力と協力によって切りひらくことのできる可能な未来なのである。

（大学文学部教授）

### 表紙の筆跡について

本誌は先号（六十九号）から、表紙のバックに新島先生の書を用いることにした。それまでは、教職員などによって描かれた同志社の建築物であった。

この号の表紙には、新島先生が自ら記された社務・校務記録である「同志社記事」の一部を用いた。この記録は、草創期の同志社の重要な動向を今日に伝えるほとんど唯一の学内文書であり、原本は社史料編集所に保存されている。

新島先生の自筆といまいったが、自筆の部分は簿冊の表紙題字と、本文の明治十六年二月十三日から十七年三月二十二日、十八年十二月十七日から十九年九月十七日までである。他は新島公義の筆跡（推定）その他である。

表紙に用いた部分は、明治十六年二月十三日、それまで新島と山本覚馬のみであった社員に、松山高吉、伊勢時雄、中村栄助の三名を加えて五名とし、四条目の社則を定めているが、その社則の冒頭で、四条目の全文は次のとおり記されている。

一、同志社ハ五人ヲ以テ組織シ此五人ハ社ノ財産ヲ所有シ基督教主義ヲ以テ学校ヲ維持スルヲ務メ且学校ト政府トノ間ニ生スル百般ノ事務ヲ弁理スベシ

二、社員中若シ欠アルトキハ現存ノ者新ニ撰択シテ之ヲ捕ヒ社ヲ永続セシムベシ又社員中ヨリ一人ヲ撰テ校長トナスヘシ

三、校内百般ノ事務ハ各校之内外ノ教員校長ト協議ノ上之ヲ弁理スベシ

四、外国ヨリ寄贈シタル金ハ外国教員若シクハ他ノ委託者ヨリ各校ノ教員ト協議ノ上支払フベシ

「同志社寄附行為」の濫觴とみてよいであらう。

# 同志社の課題

## 21世紀の私学と同志社

深田尚彦

### 一 21世紀の問題

21世紀の様子がどうであるかは定かでないが過去の20年に比しその数倍の速度で多様な変革が今後に起る事だけは確かである。航空機その他交通機関の高速化、新しいエネルギー源の開発、記憶容量の巨大な超高速コンピュータの社会、産業、家庭への導入、スペースシャトル等による宇宙空間の利用、医学の進歩による長寿の達成と疾病対策による人口爆発等は多様な新問題を人間世界に惹き起す。人間は昔ながらのテンポで呼吸し歩行し行動する。食糧供給は人口爆発に平行しては増加しない。人間の作った機械と人間の協働は従来見られなかった困難な適応問題を産む。

動物は本能によって生きる所以で学習不要であるが、人間は変化する世界に適応できる反面、行動様式の殆んどを後天的に学習する。そこで社会の文化水準の向上に伴い、日常生活に必要な習慣、技術、知識等の獲得の為に一層多年を要する事となる。日本の義務教育は明治の四年制から六、八、九年制へと進んだ。今日では殆んどが高校進学をするので義務教育十二年と言うに等しい実情である。我々が教育している若者が社会の中堅となつて活躍する時期は21世紀である。我々の教育計画はそれにふさわしいものであろうか。教育はいつも人間に不可欠、又進歩する世界の中で教育は不断に、これによいのか」と自問して改革を求めねばならぬ。

### 二 教育の役割

### 三 大学の役割

法律が何と定めているかは別として大学は、初等教育が習慣や技

能、知識を学んで反復利用する事を助けるのに反し、より一層、創造的、開發的でなければならぬ。新しい問題を解決する能力を育てるのが大学の機能である。初歩の知的活動は受身的に吸収されるが、学習は高度になる程より一層原理的、抽象的であり、積極的に学ばねばならぬ。

21世紀の大学を考えるに当って12世紀初頭にボローニャ、パリで誕生した大学の起源を考える事は有用である。その頃、スペインのアラビア人者を通じて大量の知識が西欧に流れ込んだ。ユークリッドの幾何学、トレミーの天文学や地理学、アリストテレスの諸学説やギリシャの医学等がそれで、多くの学者達はこれら古代の学問を所有する事に希望を持った。この学問復興熱がボローニャではウニベルシタス(学生と教師の集団)を作った。学生の急な集合の為に高騰した食費、下宿代に対して学徒達は組合を作って対抗した。気に入らぬ事があるところの集団は一夜にして町を退去した。その頃のウニベルシタスは教室や校舎を持たず教師の下宿に集まって聴講したからである。教育は本来、教師と生徒で成り立つのであるが、医学、工学の様な専門(職業)学校の誕生と共に実験室や教室を持つようになつた。この様な大学で学んだ人達は法官、牧師、医師となつて社会に寄与した。大学出身者が皆社会的に活躍したと言う事も又、大切な事実である。(昨今では大学を出ても職が無いと言う事態もある。)この種の大学が今のオクスフォードやケンブリッジの元祖で紳士の為の大学と呼ばれる。これに反し医学や工学の専門家を作る大学が新しい近代の職業大学、専門大学なのである。相違は前者が汎用コースであるのに、後者は専門コースだと言う事であ

る。

西欧の大学は数多くの学者、政治家、文人を社会、世界に送り出して来た(但し画家、文人、音楽家の様な芸術家には、大学中退者や大学に行かなかつた人も多いし、この事は大学の機能を考える上で興味深い。これは日本でも同様だと言えよ)。ゲッチンゲン大学のガウスの許に集まつた数学の英才達、ベルリン大学に集まつたゲシュタルト心理学者達、ライプチヒ大学のウンントの許に集まつた世界の秀才心理学者達の例の様に大学は研究と教育の中心として社会的に大きい役割を果した。

#### 四 日本の大学

西欧の古い大学は八〇〇年近い歴史を持つのに日本の大学は最古のものでも僅か百十余年である。然も長い歴史をへて幾変遷した最新型の大学を日本は取り入れた。日本の大学の歴史は短く適応して変化する体験には乏しい。戦後アメリカの占領下で新制大学が生まれたが、この変革は純粋な日本のアイデアによるとは言えない。往年学生紛争の折に全国の多数の大学で改革案が作られたさうであるが、改革は行なわれなかつたと聞く。最も創造的であるべきウニベルシタスが極めて保守的な態度をとつてゐるのは残念な事である。更に戦後アメリカの制度をとつてきた日本の一般教養は形としては存在するが、大学も学生も余り尊重してゐない風である。然しアメリカのハーバード大学では新しく一般教養を改組した。日本の大学では専門、職業コースを重んじるが卒業生の動きを見ると必ずし

もそれらしい活躍をしてはいない。工医農等は専門コースであるが  
文法経済学部はどちらかと言えば汎用コースである。

学問すると言うと日本人は狭い専門水道に入るのを好むが、本来  
学問は一般原理の探究に興味を示すものだから広い基礎知識を必要  
とするのではなからうか。たとえ狭い専門に入るとしても、学問を  
深めるには、広い学識と教養が必要なのは明白である。

## 五 イギリスの出版物

日本のこの専門水道愛好に反省を与えるのはイギリスの出版物  
だ。20年も前に一〇〇〇番目としてアリストテレスの倫理学を刊行  
したエヴリマンズ文庫はその後繰返しこの一千冊を刷って世界に売  
り続けている。日本の岩波新書は一九三八年から今日迄に約一二〇  
〇点を刊行したが、(人口五三〇〇万の)イギリスのペリカン文庫  
は一九三〇年( )から今日迄に二三〇〇点を出して尚毎月興味深い  
新書版を世界に送っている。その著者にはアメリカ人も時に含まれ  
るがイギリスの学者が多く彼等の学問の中と深みを示すに充分であ  
る。ケンブリッジ大学出版の図書目録で注文した時一九二七年の新  
刊( )が送られて来たのは驚いた。五十年も売れ残る本を出した  
と言うのは色々解し得るが興味深い。ロエブ古典文庫のモラリア  
(ブルターク著)は一九二七年に第一巻を出して今日迄十五巻を刊  
行、未だに未完了である。勿論、補遺と索引の一卷文ではあるが日  
本では起り得ぬ事態である。ヨーロッパでは五十年、百年かけて刊  
行されるシリーズもの(時に唯の三、四冊物)の例には事欠かぬ。

日本人の仕事の迅速さは誇るべきであり、遅いのがよいのではない  
が、百年かけても仕事を続けるこの粘りは学ぶべきだ。出版即大学  
ではないがこの様な出版を支える空気がイギリスの大学にはあるの  
だと思ふ。

## 六 私学

私学には独自の創設者の精神があろうし時には特異な教育計画や  
教育法があろう。同志社は独立戦争の終った年から十年滞米した新  
島襄によりキリスト教主義学校として建てられた。蘭学時代の次の  
英学の時代にあつては、アメリカ人教師を持つ丈で同志社は魅力的  
だったと思ふが、若いアメリカを見て帰った教育熱にあふれる新島  
にふれる事は更に、否これこそ同志社の魅力であつたに違いない。  
アーモスト大学の旧礼拝室の正面ステーションの右側に新島、対して左  
側にクーリッジ大統領、アーモストの誇る二人の卒業生の肖像がそ  
こから我々を見ている。歴代総長の肖像はホルルの周囲(座席の横  
と後)に並んでいる。今や明治は遠く新島にふれた、新島を見た人  
はいない。唯新島精神、国際主義等と言ふ言葉文が往行して新島の  
人間は消えて行く。我々は新島の書簡や日記、説教原稿や遺品を通  
して彼にふれるべきではなからうか。彼は大学者、経世家、文筆家  
のいづれでもなく一人の信仰厚い教育者であつた。これは何にも優  
る同志社人の誇りと幸福である。学問には同志社独自のもの等はな  
いが新島にふれる事は同志社でのみのなし得る事である。吉田松陰  
が下田で失敗した十一年後に新島は函館に赴き脱出に成功した。彼

には情熱に加えて叡智があった。新島は一介の教師ではあったが国禁を冒して且つ単身で国外に脱出し得る人であった。私学は国公立校にない味を持って人間作りをすべきだ。教育はいつの世にあっても人間によってのみ為し得る人間の為の不可欠の営みなのである。

## 七 同志社

明治の初期にアメリカ人とキリスト教を持った学校、そして新島襄の人物、これらは同志社の誇りであつたらうが今や事情は變つた。日本が何を求めるか、を問わねばならぬ。

大学進学者のふえた今日大学卒業者が社会の中核にすべて位する事は難しい。唯すべての卒業生が社会に貢献する誠実さと能力を持つ様でありたい。大学で何を学んでも急進歩を遂げる社会では習つた内容は間もなく古びる。何が来ようともそれに応じ得る態度を養つておくべきだ。まず現実を観察し、記述し分析と考察を行い、総合と理論化を試みる事こそ社会に対する実験的態度と言えよう。解決の能力に個人差があつても、解決しようとする態度の訓練はできるのではないか。講義の静聴、筆記も悪くはないが習得意欲が先であり、驚きと疑いが学習には基本的である。学問の方法としては、討論し文書に表現する訓練を一層重視すべきだし、学問の対象が自然(天地)と人間(社会)で決して書籍ではない事も確認すべきである。教育の具体策を語る紙幅は無いが、校祖新島襄が七人の生徒を前に希望に充ちて講義を始めた創設の頃を臉に浮べて新しい教育を作り上げねばならぬと思う。

(女子大学教授)

## 『同志社談叢』の創刊

同志社社史史料編集所では、この二月末に左のような雑誌を創刊した(A6版・約二二〇ページ)。この雑誌は、新島に関する研究論文はもとより先年刊行した『同志社百年史』で取り扱わなかつた同志社史に関するテーマおよび、新しい角度、新しい資料にもとづく同志社史研究論文を掲載するものである。また、座談会やインタビューなどのほか、『百年史』に収録できなかった同志社資料も随時収録する。収益事業課で取り扱っている。

### 『同志社談叢』創刊号

#### 目次

序文	上野 直藏
論文	
新島襄と自然科学	島尾 永康
アメリカン・ボードの資料を通して見た	
初期の同志社	井上 勝也
新島襄と加藤勝弥	本井 康博
北越学館をめぐる	
史料	
同志社社員会録事	
——自明治二九年三月	
——至明治三二年三月——	



# 研究と教育を結ぶ「学」の形成

## 科学と哲学の融合

吉 武 孝 祐

「調達主義」——それは現代日本の悪の源泉である。金権・激税・高物価・公害など、何れも異常な調達競争のもたらした「悪徳の報酬」ではなかったか。それのみか、調達万能の風潮は、教育の面では進学システムまでも侵蝕するにいたり、教育機関をして「資格調達機関」に委容させるものともなったのだ。だが、時代は調達から運用（機能）へ、「不確実性時代」から「高形成時代」を迎えようとしている。そうなら、いまや調達主義との訣別は急務であろう。

いったい現代の知的頹廢の病根は、つづまるどころ「調達主義」と、そのメダルの裏をなす悪しき「相対主義」「楽観論」への甘えにある。たとえば石油などの資源危機にしても、それがかんたんに代替エネルギー政策にすりかえられるなら、つまりは、どこにかなるサの楽観論にほかならず、人類は救われぬ。現実にはまだ「ある」資源は、本来的には「ない」のだとの本源的欠如の認識<sup>1</sup>悲劇性においてとらえかえされたとき、真の救済への道が開かれる。

こうした認識は大学問題についても例外ではありえない。たとえば学費問題についても、それが「諸物価高騰のおり、若干の値

上げは大学財政上、止むをえない」というわけ知り顔の「祭司的」口上の中に収納されるだけですむものなのか。それを、こうした低劣な相対主義への羞恥<sup>2</sup>悲劇性において直視することがないならば、知的腐朽からの脱出は絶望に近いであろう。そもそも学費値上げの基本的条件は「財務的必然性」と、それを内的に規定する「精神的必然性」とである。学費は、直接的には大学財務の問題であるにしても、本質的には、学費の社会性、公共性にかんがみても、値上げのつど、加重さるべき個々の教員の教学的責任への「問い」であるとの自覚において即自的につみ直されねばならぬ筋の問題なのである。いいかえれば、学費は、それが「内面的危急の置換」という悲劇性において認識されるとき、はじめて精神的必然性があたえられるのである。その場合にのみ、学費問題はそれが教師ひとりひとりの理性の内的規準として身についた属性に転化せしめられることとなるだろう。その点からみると、さきに行われた学費改訂は、その財務的適否を越えて、より以上にこうした精神的必然性<sup>3</sup>悲劇性の自覚を欠くところがなかったとい切れるであろうか。

ところでこうした悲劇性の認識の欠落は、また学費改訂につづく  
休講・レポート試験切替など一連の措置によって、さらに追認され  
る仕末となったのだ。表向きの理由は、授業妨害が相次ぐからだとい  
う。だが、そこには情勢認識の安易さのほかに、根本問題である  
べき学問のあり方をめぐる教師と学生との関係は一向に反省される  
ところがないのである。これでよいのだろうか。

こうみてくるとき、大学の「再生」は、いまや知性の府としての  
大学の悲劇性Ⅱ「死」の自覚に求められねばならないとおもうのであ  
る。学生運動対策にとらわれて、教師と学生との関係の新しいあり  
方への「問い」を忘れた糊塗的対応の積み重ねのなから新らしい  
大学の創造は期待されえないであろう。

もちろんここで新しい大学像を云々する余裕はないが、端的にい  
って総合大学の実をあげる道は二つだとおもう。一は、現在の学部  
構成を廃止して、社会・人文系学部と自然科学系ぐらいに大別し、専  
門的に細分された学問の横断的統合を強めてゆく方向であり、二  
は、学部に徹する姿勢の中で学問の垂直的統合を進めてゆく方向で  
ある。そしてわたくしは、同志社の場合についていうなら、可能的  
には後者の道を選ぶべきだと考える。ただここでの学部主義とは、  
既成の学部を固執する、縄張り意識ではなく、学部に徹すること  
によって学部を越える（超えるに非ず）こと、すなわち学問と教育  
とを結ぶ次元での「学」の再構築に徹する姿勢を期待するものにほ  
かならない。いいかえれば、科学と哲学を結ぶこと、いや正確に  
は、科学の哲学的化への期待である。新しい学部とは、哲学的化と  
いう意味において、徹学部であるべきだとおもう。

ヤスパースは「生きた学問の生氣は、一つの全体への関係のなか  
に実存する。だからこそ学生を、彼の特殊学にひそむこの全体の理  
念によってまた、認識作用の全体の理念によって充たすことが大学  
の意味である」という（『大学の理念』九五ページ）。もちろん「哲  
学化」ということはなにも、規範としての哲学の講座数をふやせ、  
ということではなく、科学のなかの哲学、あるいは、社会的生活の  
なかの哲学をめざすものである。「あなたの学問は、それが人間に  
とって、人格の自由なる全人的発展にとってまた、日本の切実なる  
課題解決の鍵としてどういう意味をもつのか」との問いに答えるこ  
とができないなら、学問は「精神」をもちえない。まさに「学」に  
要るものは論理であるよりも「いのち」である。

新しい大学・新しい学部は、乾いた専門的知識教育の殻を破って、  
研究と教育を内的に結ぶ「学」の構築という知的誠実さを通じて、  
社会的要求に対する大学の能動的対応への道を拓いてゆくべきであ  
る。そしてそのためにはまず、教師ひとりひとりが自己の学問のな  
かにひそむ「哲学」への情動をつねに鼓舞しつづけることが要求さ  
れてくるであろう。ここでふたたびヤスパースの言葉を引くなら  
「本源的無知」に徹することこそ新しい教師像であるといえよう。  
わたくしは言葉で表現するなら「無学致知、無心有情」である。  
「無知」といい、「無学」といい、それは未だ知らない、ことではな  
く、科学における哲学的思考の自己形成をせじたい、にほかならな  
い。人は自ら豊かにみえるほどに、「恥」を知る。「悲劇性」への回  
帰である。まさに知性とは「恥性」である。

そして知性が「恥性」として自覚されるとき、研究と教育を結ぶ

「学問」の形成したいが、個々の教師の身についた人格的属性となるであろう。学部に徹することの意味はここに求められるとおもわれるのである。こうして学部主義の哲学は、学部が「相対反」の立場を越えて「絶対反」の立場に徹する姿勢であるといえよう。学部が、学部において徹学する $\parallel$ 哲学するとき、そのまま同時に総合大学性と重合する。すなわち対立の統一ではなく、対立における統一である。わたくしは、学部とは、大学の構成要素ではなく、形成要素であると考へたい。学部が構成要素にとどまるとき、総合大学とは諸学部の算術合計としての「集合大学」にすぎないものとなり、既成学部の「縄張り」意識を温存することになりかねない。そうではなしに、学部が、形成要素として自己完結するとき、学部のままですべて同時に総合性をなうことができる。学部に徹することが学部を越えることの意味をもつのだ。

そうした形成要素の自覚に発想するかぎりにおいて、学部はそのありかを再発見することができるし、また、新しい学部——たとえば教養学部の構築なども本来的な意味をもちうるであろう。そしてここに学部、したがって大学における「自治」の精神が躍動しはじめることとなるであろう。

ところで、学部自治の問題はこれだけに尽きるものではない。学部自治は、学問の問題から、さらに財政をふくめた大学の管理運営の問題についても「徹学」の精神を貫くことがなかつたら自治の内実は血抜かれるであろう。この点で、同志社のような私学においては、「定食メニュー」化し、官僚化した現行予算制度を解体し、予算の形成および配分過程のなかで、一般教養をふくめた各学部のいわ

ば、教学生産点、からの自主的要求と使途の範囲を思い切つて拡大することだ。とくに人事や研究は、本来的に会計年度を越えるものであるから、やや長期の経営年度ベースでの自主的な使途が認められるのが筋であろう。それなくして、学部の自治を守っているなどは公言できないからである。

商学部教授会は、すでに昭和四十七年に「教授会宣言」を決議している。教授会は会議体であるとともに、また組織体であり、したがって組織としての人格において、教学的自己完結の要求から、給与や財政や管理運営の諸問題についても積極的な発言を行うというものである。学部自治の進路を示したものともいえよう。

ともあれ大学はいまこそ、学生対策的発想から脱皮して「無学致知」の自覚から、研究と教育——科学と哲学を結ぶ「学」の創造に挑まねばならない。その視点いや、視座を失うなら、大学は二十一世紀を待たずして「意味」を失うであろう。現象的実在、本質的非実在である。

ひるがえって今日、遺伝子工学の躍進は、二十一世紀の人類史のあり方を規定するにちがいない。それは同時に宗教と科学との闘いに新しい地平を拓くものでもあるだろう。その意味では二十一世紀は宗教と哲学の時代であるともいえよう。ともあれそういう歴史的潮流に能動的に順応してゆくためにも、未来に向けてではなく、未来から考へる「学」の創造は、いよいよ緊切さを加えるのではなからうか。未来は「語る」ものでなく「創る」ものである。

(大学商学部教授)